

平成 21 年 6 月 22 日現在

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2007-2008

課題番号：19720073

研究課題名（和文） 第一次大戦期の英国におけるナショナリズムの形成と作家による教育テキストとの関係

研究課題名（英文） Nationalist Ideologies in the Textbooks by British Novelists in the era of the Great War

研究代表者

岩井 学 (Iwai Gaku)

熊本保健科学大学・保健科学部・准教授

研究者番号: 70369859

研究成果の概要：

第一次大戦直前から戦後にかけて、何人かのイギリス人作家が歴史書を書いている。R・キップリング『少年少女イギリスの歴史』（1911年、C・R・L・フレッチャーとの共著）、G・K・チェスタートン『イギリス小史』（1917年）、D・H・ロレンス『ヨーロッパ史のうねり』（1919年）、H・G・ウェルズ『世界史大系』（1920年）である。本研究では、これらのテキストを当時の文化的・政治的文脈のなかに位置づけながらそのイデオロギー性を探った。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	700,000	0	700,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総計			

研究分野：

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学

キーワード：D・H・ロレンス、H・G・ウェルズ、J・M・バリー、第一次世界大戦、愛国ナショナリズム

1. 研究開始当初の背景

筆者はこれまでD・H・ロレンスの短編、長編、H・G・ウェルズのSFおよびJ・M・バリーのファンタジーといったテキストの中から、第一次大戦以前のもので分析対象とし、これら文学テキストと、社会進化論、人種退化論、優生学といったイデオロギーの形成との関係を研究してきた。

これらの研究を進める中で、大英帝国の衰退に直面した英国では、19世紀末から、

パブリックスクールを中心に愛国教育が全面に押し出されてくることに気づいた。そしてその観点から、例えばイートン校出身のフックと労働者階級とおぼしき捨て子たちが戦う『ピーターとウエンディ』を分析するなどしてきた。これらの研究を通して、教育という観点から作家たちのテキストにアプローチすることで、当時の社会を覆っていたイデオロギーの形成もしくは解体に作家たちがどのような役割を果

たしたのが明らかになると考えた。

2. 研究の目的

本研究の中心的テーマは、教育を通してのナショナリズムの形成と作家との関係である。中心的に取り上げる作家はD・H・ロレンス、H・G・ウェルズ、J・M・バリーの三人である。この三者をつなぐものは、1915年から1920年にかけて、いずれも学校用あるいは一般向けのテキストを執筆したり、また自分の作品がテキストとして使用されているということである。

大戦前の社会進化論、優生学、人種退化論により形成された国家観、および第一次大戦中から戦後にかけての国家のあり方をめぐる議論を踏まえ、国民国家のアイデンティティおよびナショナリズムの形成とロレンス、ウェルズ、バリーの教育用テキストとはどのような関係にあったのか、これらの作家たちは、テキストを執筆することで、このようなイデオロギーにどのようなスタンスを取っていたのか、またこの時期にテキストを書くということはどのような行為であったのかという点を明らかにすることが本研究の目的である。

3. 研究の方法

(1) R・キップリング『少年少女イギリスの歴史』、G・K・チェスタートン『イギリス小史』、D・H・ロレンスの『ヨーロッパ史のうねり』、H・G・ウェルズ『世界史大系』を1910年代英国の文化的・政治的文脈のなかに位置づけ、教育、愛国主義、ナショナリズムといった点から、英国人作家たちによるこれらの歴史書のイデオロギー性を探る。

(2) 第一次大戦を直接扱っていないD・H・ロレンス『ヨーロッパ史のうねり』に、当時のイデオロギーやナショナリズムがどのような形で表れているのかといった点を、このテキストにおけるドイツ表象から分析する。

(3) J・M・バリーの教育用テキストに焦点を当て、バリーのオリジナル・テキストがどのような経緯で、どのような意図のもとに教育用テキストとして編纂されたのかについて、文献、研究書、テキストの通読・整理を通して研究を進める。

4. 研究成果

20世紀初頭の英国社会を覆った空気は、戦前の愛国主義の高揚から、大戦末期の厭戦気分蔓延へと大きく移り変わっていった。この社会のエートスを反映し、大戦前

から大戦初頭に書かれたキップリングおよびチェスタートンの歴史書は極めて愛国的なものとなっている。一方戦後に執筆されたウェルズの歴史書は、大戦の反省を踏まえた、平和を希求する内容となっている。これに対しロレンスの『ヨーロッパ史のうねり』は、一見平易な文章のなかに、戦争に対するアンビバレントな感情が刻み込まれている。そこにはあからさまに愛国的な記述はないが、対戦中に流布された国家イデオロギーの枠組みが時として現れる。また一方で、大戦末期に見られた厭戦気分もしばしば顔をのぞかせる。『ヨーロッパ史のうねり』には第一次世界大戦を直接的に扱った章はないにもかかわらず、1910年代の英国社会に見られた、第一次大戦に対する相矛盾する戦争観が刻み込まれているのである。

また『ヨーロッパ史のうねり』におけるドイツ表象を分析すると、このテキストと国家イデオロギーとの微妙な関係がさらに明らかになる。ロレンスによるゲルマン民族およびフン族の描写、そしてロレンスの近代ドイツ観に焦点を当て分析していくと、親独的ともとれる描写とともに、当時の人々の間に流布していたイメージの連鎖、すなわちドイツ人＝フン族／野蛮／アジア／退化／小動物といった反独的な枠組みも顔をのぞかせる。ドイツをめぐる『ヨーロッパ史のうねり』の中の記述には、ロレンス独自のドイツ観と、当時のプロパガンダによって流布された反独イデオロギーが分かち難く絡み合っているのである。

バリーのテキストに関する研究は現在鋭意進行中であり、今後、マニスクリプト、書簡、創作ノートなどの分析も加えながら、上記で明らかになった研究結果と関連付けていきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 件)

〔学会発表〕(計 2件)

(1) 岩井学、「書簡は石炭となるかダイヤモンドとなるか——ロレンス研究に書簡を利用する際の危険性と可能性」日本ロレンス協会第39回大会、2008年6月21日、松山大学

(2) IWAI Gaku, "Re-reading *Movements in European History* in the Social and Political Contexts of Britain during the second decade of the Twentieth Century". The 11th International D. H. Lawrence Conference. 19/August/2007, Nottingham, UK.

(2)研究分担者

(3)連携研究者

〔図書〕(計 2件)

(1) 岩井学(共著)、D・H・ロレンス研究 (仮題)、朝日出版社、2010年3月(予定)

(2) IWAI Gaku (共著)、*Return to Eastwood: Conference volume* (仮題)、New Ventures/CCC Press, 2009 (投稿審査中)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

取得状況(計 件)

〔その他〕

6. 研究組織
(1)研究代表者